

④

# 古文書三昧

古文書講座講義録シリーズ

vol.4

## お銀さまを訪ねて

渡辺崋山旂相日記より

一杉 勝

## はじめに

本書は、約十年前から続けている古文書講座の教材として使用した古文書原文と、その解説文、解説をタイトルづつまとめて小冊子にしたものです。

教材の内容は主として江戸時代ですが、一部、戦国時代および明治初期の事柄も含まれます。

原文は図書館、公文書館、博物館、史料館、大学図書館などから入手したものであり、原文掲載個所にその入手先、出典を記載しています。

ページ数を節約するために原文の編集を行い、「A4横」あるいは「A4縦」に収まるように調整しています。このため文字が大きすぎたり、小さすぎたりする事があります。

解説には慎重を期しましたが、第三者による校閲などを経りません。誤字・脱字、あるいは解説間違いなどもあるかと思いますがご容赦下さい。

ご指摘点がありましたら、巻末の著者メールアドレスにお知らせいただければ幸いです。

もともとこの講義録として作成したのですが、電子書籍の形に編集し直して、公開するにいたしました。これから古文書を学ぼうとする方々、更に多くの古文書を読みたいという方々、古文書講座の教材を探している方々のために、少しでも参考になれば望外の喜びです。

著者 一杉 勝。

## 解説文の凡例

- 一、解説文は、原文をその井井活字で置き換えたもので、漢文の読み下し文にある仮名の点(てん)や、二点なごは省略しています。
- 二、漢字は原則として常用漢字を用いるが、原文のくずし字が旧字をくずしたものである場合は理解するため、解説文にも適宜旧字を使用しています。
- 三、変体仮名は原則としてひらがなで直した。「𪛗」「𪛘」も原則「え」「さ」としたが、一部、原文の雰囲気伝えるため「𪛗」「𪛘」も「め」「お」とする事もあつた。
- 四、助詞の「者」「語」「は」「を」「と」と表記したが、目的格助詞の「江」「上」については現代語の「へ」「上」と表記した。
- 五、また、「哉」「也」「乎」「を」「と」と表記しています。
- 六、「よ」「な」「を」以外の非常用漢字は「よ」「な」「を」と表記しています。
- 七、原文に句読点がない(しじやが多い)が、解説文は読みやすく、意味をわけるために、多めに句読点をいれています。





旅の出発 九月二十日

大保辛卯九月廿日拉栴庵  
 高木子 におる 右村  
 天醫料兩到 購丹  
 竹三 銀十一錢三分又買  
 胡椒朱砂 價僅一銖訪  
 太白堂主人 長谷川氏 到

大連  
 7. 8/44  
 内交

青山飯酒 長肆 投二石  
 三十 去

道元坂購煙管銅錢七十五  
 權卷



旂相日記

天保辛卯九月廿日、拉梧庵

・天保辛卯…天保二年

(一八三二)

高木子之相厚木村、

・梧庵

天翳雨到、購蓑

・高木子

笠、銀十一錢三分、又買

胡粉朱砂、價僅一銖、訪

・胡粉朱砂

・一銖

太白堂主人長谷川氏、到

青山、飯酒肆、投錢二百

・酒肆…酒屋

三十、去

幾ほども あらで帰らん 旅なれど

しばしわかれに 袖しぼりぬる

梧庵

道元坂購煙管、銅錢七十文

(煙管の絵)

原文省略

九月二十日 三宅藩邸発  
九月二十一日 荏田宿 発  
九月二十二日 鶴間宿 発

青山、道玄坂經由  
恩田、長津田經由  
大塚、小園經由

荏田宿 升屋 泊  
鶴間宿 まんじつ屋泊  
厚木宿 万年屋 泊

三日誌

鶴間をさつしびきま 又 萩所多  
田園のりらさし山を 瑞峰し  
おまふまふ取らさう 瑞峰し  
瑞峰の中より東へさうい 瑞峰し  
尾母澤 津之升乃山 ことなる 耕  
おまふまふ取らさうい 瑞峰し

一里 紫胡多し しまて 紫胡乃系  
もよふ 法山いありらうし

瀬谷村 氏川 鶴間 南より 寺あり  
妙光寺 云々 正甲 年中 鐘 鐘  
る 齋田 恩田 村 万年 寺 鐘 ナリ  
今 以 寺 云々 昔 伊 聖 入 道 経 老 ト 云  
恩田 万年 寺 云々 其 鐘 云々 鐘  
ヲ 掛 云々 出 せ 云々 道 一 ヲ 取 リ 鐘 多  
我 香 花 寺 妙 光 後 ス ト 云  
伊 賀 入 道 城 趾 恩 田 云々

野々 色 用 圃 向 云々 刈 走 大 城

廿二日 晴

鶴間を出づ。此邊も又桑柘多し。

桑柘

田圃の間に出れば、雨降山蒼

あぶり そう

雨降(あぶり)山

翠手に取るばかり。蜿蜒して一

すい えんえん

雨降(あぶり)山

矚の中に連るものは、箱根・足柄・長

蒼(そう)

尾・丹澤・津久井の山々見ゆる。耕夫

懇に某々と教ふ。

蜿蜒(えんえん)

鶴間原出づ。この原、縦十三里、横

一里、柴胡多し。よって柴胡の原

耕夫

とも呼ぶ。諸山いよいよちかし。

鶴間原

瀬谷村、武州鶴間南にあり。寺あり、

妙光寺云ふ。正中年中鑄造する所の鐘

あり。舊恩田村万年寺の鐘なりしを、

今は此寺にあり。昔伊賀入道経光と云人

恩田万年寺主と暮をあらそひし時、此鐘

を掛ものに出せしに、入道口を取り、鐘を

我香花寺妙光へ移すと云。

伊賀入道城址、恩田にあり。

野を過、田圃の間を平行す。大塚、

早川といふところ近ければ、







候得ば、かくれなき酒好きの翁なり。

年は八十にも至りぬらむ。其娘は四

人ありて、二人は江戸におれり。姉にて侍つかひは、

はやくより江戸に出、みやづかへをし、花

をかざりにしき(錦)をば着てかえりしが、

いく程もなく其母なりける人死して、

女ばかりの家なればとて、娘は小蘭村

清蔵といふ方に行、清蔵の弟

なる長右衛門といえるを、幾右衛門が

子にもらひ、二女と其家をつげり。幾右衛門

も清蔵も、いとまじしく世はわたれど、

いとまめだちたる人にて、清蔵の方は

一村はさらなり。他村へもいゆきて、人の

ために、せはしうやをおくるまじ、

家道もいと心のまゝならぬなり。さねども、

清蔵が家は一村の舊家にて、祖

大川鞆負ゆきえといひて、北条の臣にても

ありぬらん。此村の兼古某あまのといふ、むかし

やうじゆなきまものまじ、

はやく世をさけて、此村にいたりしを、

大川、此兼古を頼みてしたひ来、

た子はおのちうかきし早川村  
乃上流の流るるところを同り  
輕の流るる所を同図考りて  
小園をそのまゝに作りて  
おのちのころは早川村の  
その流るる所を同りて  
おのちのころは早川村の  
その流るる所を同りて  
おのちのころは早川村の

物に  
乃上流の流るる所を同りて  
おのちのころは早川村の  
その流るる所を同りて  
おのちのころは早川村の  
その流るる所を同りて  
おのちのころは早川村の  
その流るる所を同りて  
おのちのころは早川村の  
その流るる所を同りて  
おのちのころは早川村の

乃上流の流るる所を同りて  
おのちのころは早川村の  
その流るる所を同りて  
おのちのころは早川村の  
その流るる所を同りて  
おのちのころは早川村の  
その流るる所を同りて  
おのちのころは早川村の  
その流るる所を同りて  
おのちのころは早川村の

共に此村にすめり。やがて早川村

の長泉寺といふ寺を開き、豪農

の聞えありしといふ。紋は軍配團(扇脱カ)なり。よって

小園にては草分にて侍まがらひ「と、懇まがらひ

おしゆるこそ。幾右衛門が死せむもせ、

その娘のゆけむるをまきまき打き入し、

いと〜喜び、すゝみて細徑をた

どり行。誠によはなれたる片いなかにて、

都の空もおもひ出らわて、何となう

物かなしく、ただ木くさの香ひたかく、冷氣人を

うづ。かくしつゝゆへほむに、鶏犬

の聲遙に聞え、めしたく煙、麦搗

音、都にめしむかなぬにんちつし、

又ゆるじむしうなりたり。唯、先いそ

がわてはこり行。村落よき程に

隔へ、里の障むらびがらあえええ。はこり

ゆ、「幾右衛門家はこり、清蔵

が家はこりし」と問えむ、「幾右衛門は

清蔵が家社いん、近けれ」といふ。

「ねむらむその家おこえむ」と、銭へむし

導す。道の傍に地藏堂あり。

これを過ぐむ、栗のいがけたる障の



いと驚きたるおもむきにてたゞすめ。の導へ

童が、「これなん清蔵が子に侍る」といふに、

よく顔見れば、鼻のわたりより眉毛の

間にいたり、まがらぶべくもなき吾が

尋る人の弟なり。おもかけ。「家はごいじや」と

問ふに、いらへませで、はじり行。跡よりしき

て、其家に到。大きやかなるおもや

にて、**下屋**、木こや、左り右にならびに、

栗所せまう干ならぶ、犬・鶏ぬ守りし、

かの**武陵**ともいふべし。椽（縁）のほやう

に立てものをとら。かしらに手拭を

いただきて、老さらぼひたる女の、

「ごいねのいせ」とい、おそる／＼問ふ。我いん

に思ふやう、児共等は尋る人に似

たれど、此**女社**、姑ごてもあるべし。そむせ、

指を屈すねば、二十年あまのむかしの

かたちにてあらんやうもなければ、

**顔打まもり**とみこし見するに、耳

の下に大きやかなる疣かさあり。これなん、

まぎるるくもなき尋る人なめりとい。わい、

「我童なりし時、御身ごいと隣ごあしからたる者

なり。いさゝか其恩を報んために、厚

申す可き事(申す可き事)申す可き事  
可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事

申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事  
申す可き事(申す可き事)申す可き事

木造いたるを、道途を迂つて、いん造は  
尋ねいたれり。我面かげは、だれに  
似や、御考候へ」といえは、尚おそれ  
におそれ、「左様なる事は我が身に覚え  
侍らず、御殿様にはいづ方より到  
り玉ふや、もしや人まちがえにてま  
あしぬらと」といふ。「左にあらす、御身の  
名は何と申さ、と云えは、我名は  
町とみへんす」、「おかの名は何と云ら  
ら」と云えは、「町」といふ。おめさは、  
間違ひたらんやと、こゝろ固かせ  
なまやうに、いん造にただがひごが、ごつわ  
にいても、ただ病こそ證なるは、「お銀  
と申せし事せめりさ」と云えは、又いん  
きたる體に、「いん造はかかこつて  
時は、左もよびし事あり、「おめさぞ、  
君は**麴町**よりや入来り玉ふやと、いん造は  
いかはらしたるか鬼に、「おし樂の鬼に  
入玉え」とはいえは、皆板敷にて貴  
なし。花籠持出つ引か、いん造に  
坐を設け、いん造にかこひなる手拭



を取す（捨）しねば、まがうべへもあらぬ  
其人なり。ただなみだにむせびて、

たがひに問、答する事もなからず、時

移す。「おつ、我は何や申名に候や、

御覚候か」といふ。「おねば御前には、**上田**

**ますみ**様にても候や」「おにあらす、これ

は十五、六年もさきに、**よの外**の人に

なりたり、「おすねば渡辺登様にて

候べし。いかがの故にて御尋被下候や、

おつ夢にてもあるべし。けふは

我おつと、さりがたき用ありて、**未**

かえらず、これは二男にて幸藏<sup>十九</sup>

と申、これは女に<sup>おつ</sup>、**もつ**、**栄次郎**

<sup>八歳、これはおまき</sup>  
<sup>を導きたる童なり</sup> **留吉**<sup>三歳</sup>、「皆一同にいらなり

拜をなす。やがて**長子清吉**<sup>廿三歳</sup>

厚木迄馬引していだが、やがて帰らぬし。

いと太く遅しきおのこに<sup>おつ</sup>、**素朴**

いふばかりなし。やがていふに<sup>おつ</sup>より路

資出し、皆あたへんとはせしが、いまだ

路のほども遠く、又、は<sup>おつ</sup>に<sup>おつ</sup>まで来

ぬるに、厚木より**浦賀迄**の用也

せで**帰ん**も本意な<sup>かえり</sup>ければ、**路資**

を<sup>おつ</sup>に割て、六つ割、四分は

と人... 出... 別... 父...  
馬... 又... 一...  
... 二... 三...  
... 一...  
... 一...  
... 一...  
... 一...  
... 一...

... 強...  
... 我...  
... 都...  
... 仲...  
... 仲...  
... 仲...  
... 仲...  
... 仲...  
... 仲...  
... 仲...

... 一...  
... 一...

其にあたえ、式割は其父と

清蔵にあとぶ。又、よろこびかぎりなり。

そばがき二碗食す。梧庵は一

碗にて止む。酒三盞さん、かるく飲す。

濁酒のごへ通らず。吸もの・とじひ・

たまご、味よろしからず、一箸給へる。梅

ぼしうまし。栗餅きつ食ふ。

其人よろこびのあまり、何かなと工夫

して、かくはもてなしけるなり。

幾右衛門来年七十八、強壮なる翁なり。

又、行すへ・こし方の物がたりに、なみだ落る事、

折々なり。我が身の上を語りては

なき、都の空を思ひてはなへ、

ただ、けふといふけふ、佛とや云ん、

神とや云ん、かゝる御人の草の庵

に御尋候はとて、むかしがたりに時

移りて、日西にかたぶく。かくあらんも

農業のとまたげせとて、行すえ

の事なごうけ引ては出じし。長子清

古、馬引き出し、「のりまへ」といふ。断

て、かちより行。頭陀しだと笈おひとを



助けられ、村堺むらさかいさつかりさつかり皆門

ておくる。村の人々もきも打ちつびて、

皆門に出立て見送る。又武陵

真境を見るまぎやうをみる。すずすずに思しふ。

そもく此小園といふ所は、戸

わずかに二、三軒に不過、高は貳百石、

堀田相模守どのほりださうもすけの領なり。土、赤黒、

砂まじりにて、下石といふ。田少く圃多ほて。

早川も蕭々しやうしやうたる村なり。佐倉さくらち

一年に一度、人別あらために來。農はちうせ。

寺社迄も其寓居いんきょに行て禮を

なす。又、こゝにて偵察ていさつをなすを聞きけり。

(以下略)

